兵庫教育大学　研究紀要　第22巻　2002年3月　pp. 31－46

George Eliot の3編の詩と宗教

George Eliot's Three Poems and Her Religion

大　嶋　　浩*
Hiroshi OSHIMA

After her first conversion, the development of George Eliot's view of religious beliefs can be divided into three stages: (i) ascetic and evangelical Christianity; (ii) a tendency towards pantheism; (iii) a religion of humanity. So far students of Eliot have followed the progression of her beliefs mainly through her letters, journals and novels. This essay is an attempt to review that progression through her poetry. Eliot's evangelical faith in the infallibility of the Bible and Christian immortality is expressed in her first published work, "Knowing that shortly I must put off this tabernacle"(alias "Farewell"). The early phase of Eliot's second conversion is reflected in her Romantic and somewhat pantheistic short poem, "Mid the Rich Store of Nature's Gifts to Man." The final result of her second conversion is declared in her most famous poem, "O May I Join the Choir Invisible," in which we can recognize her quite secular and humanistic view of religious beliefs, that is, Eliot's religion of humanity. Thus these three poems provide, if read serially and chronologically, a glimpse into Eliot's "way of the soul". In this sense, the three together may be regarded as Eliot's concise version of *In Memoriam*.

キーワード：ジョージ・エリオット　詩　宗教　宗教的回心
Key words：George Eliot, poetry, religion, conversion

I　はじめに

ジョージ・エリオット（George Eliot, 1819-80）と19世紀英国の時代思潮との関係は，しばしば引用される，以下のバジル・ウィリー（Basil Willey）の評言の中に適切に要約されている：

> 彼女の発展，彼女の知的生涯は，その[世紀の]最もきわだった傾向の範例であり，図表なのである。福音主義のキリスト教から出発して，その曲線は懐疑を経て，再解釈されたキリストと〈人間の宗教〉[人類教]へと進むのであり，〈神〉から始まって〈義務〉に終わるのである。[1]

熱烈な信仰から懐疑を経て新しい信仰へいたる，19世紀英国の知的主潮の「範例」としてのエリオットの宗教的回心の軌跡に関しては，彼女の日記や書簡の中に具体的に，あるいは，彼女の小説（例えば『サイラス・マーナー』[*Silas Marner*, 1861]）の中に寓意的にたどる試みがなされてきた。[2] 本稿が試みるのは，その軌跡を彼女の詩の中にたどろうとするものである。

宗教的回心の軌跡を扱ったヴィクトリア朝の詩といえば，まずテニスン（Alfred Tennyson, 1809-92）の『イン・メモリアム』（*In Memoriam*, 1850）が挙げられる。ケンブリッジ時代の親友アーサー・ヘンリー・ハラム（Arthur Henry Hallam, 1811-33）の死を悼む挽歌で，1833年から1850年にいたる18年間の，故人に対する詩人の折々の思いを集めたものである。親友の死を悲しみ，亡友の霊魂の不滅を信じようとするが，自然や人生，宗教に対する深い懐疑がテニスンを捉える。しかし，やがてその悲哀と懐疑を克服して，テニスンは愛と信仰を新たにうち立てていくのである。[3] エリオットは小説家になる前の青春時代と作家活動の後期に詩作を行っているが，惜しむらくは彼女の場合，懐疑を経て新たな信仰へいたる，自らの「魂の経路」（The Way of the Soul）[4]を率直に吐露し，記録した『イン・メモリアム』に相当する長編詩を残してはいない。とはいえ，彼女の詩を年代順に見ていくとき，そこにエリオット自身の「魂の経路」を垣間見ることができるようである。本稿が特に注目するのは，これまでほとんど取り上げられることのなかったエリオットの初期の詩の2編およびエリオットの詩のなかで唯一人口に膾炙した後期の詩の１編である。

II　福音主義のキリスト教徒

ジョージ・エリオットことメアリ・アン・エヴァンズ（Mary Ann Evans；以下，本稿ではエリオットに言及する場合，小説家以前を「メアリ・アン」，小説家となってからを「エリオット」，両者を指す場合は「メアリ・アンないしエリオット」と呼ぶことにする）が生涯に著した作品（エッセイ，小説，詩）の中で，一番最初に活字となって発表された作品は，十代の終わり頃に執筆し

＊兵庫教育大学第２部（言語系教育講座）
平成13年10月10日受理

た詩である。短詩「この幕屋を脱ぎ捨てる時が間近であることを知っている」(以下,「この幕屋を」)[5] がそれである。

この詩はもともと1839年7月17日，かつてのメアリ・アンの恩師で当時の彼女の精神的指導者であったマライア・ルイス（Maria Lewis, 1800?-87）に，メアリ・アンが「昨晩の孤独な散歩が産んだ未熟な果実」[6] として書き送ったものであった。そしてマライア・ルイスにしきりに勧められて，メアリ・アンはその詩を『クリスチャン・オブザーヴァー』(*Chiristian Observer*) 誌に投稿し，その結果，その雑誌の翌年の1月号にその詩がM. A. E.（メアリ・アン [Mary Ann Evans]のイニシャル）という署名入りで掲載されたのである。

1839年といえば，メアリ・アンが，母の死（1836年2月），姉クリスティアナ（Christiana, 1814-59）の結婚（1837年5月）に伴い，文字通り一家の主婦の役割を一手に引き受け，グリフ・ハウス（Griff House）の家政を切り盛りすると同時に慈善活動にもいそしみながら，片や種々の読書にふけり，幾つかの外国語を学んでいる時期にあたる。この詩が書かれてからおよそ1年半後，そしてこの詩の発表からわずか1年後には，メアリ・アンは教会の礼拝に行くことを拒むことになるが，この頃の彼女は，その詩の投稿経緯と投稿誌（『クリスチャン・オブザーヴァー』誌は福音主義的英国国教会派の月刊宗教雑誌）[7]からも推察されるように，依然として，熱心な福音主義者のマライア・ルイスと堅い精神的絆で結ばれた，敬虔な福音主義者であった。

福音主義には，英国国教会の福音主義者だけを指す狭義の意味と，英国国教会の福音主義的一派からウェスリ派によって統轄される，様々な非国教派に至る，プロテスタント主義の全域を包含する広義の意味がある。[8] メアリ・アンの福音主義という場合，この広義の意味が当てはまる。彼女には非国教派も影響を与えているからである。まず，ここで1830年代に至るまでのメアリ・アンの宗教を概観しておこう。

(i) 古い高教会派から福音主義教徒へ

そもそも英国国教徒の両親の下に生まれたメアリ・アンは生まれて1週間後，チルヴァーズ・コトン（Chilvers Coton）教区の英国国教会（Chilvers Coton Church）で洗礼を受けている。父親とコヴェントリ（Coventry）に移り住むまでの20年間あまり，メアリ・アンは寄宿学校に行っている時を除いて，毎日曜日には必ずこのチルヴァーズ・コトン教会の日曜日の朝の礼拝に家族そろって出かけていたと言われている。父親ロバート・エヴァンズ（Robert Evans, 1773-1849）を家長とするメアリ・アンの一家の宗教は「旧式の古い高教会派的なもの」[9] であった。

そのような英国国教徒のメアリ・アンが福音主義と出会ったのは，1828年ナニートン（Nuneaton）の英国国教徒の寄宿学校（Mrs. Wallington's Boarding School）に入学してからである。[10] その学校の校長が先述の熱心な福音主義者マライア・ルイスだったのである。

福音主義運動は1730年代のジョン（John Wesley, 1703-91）およびチャールズ・ウェスリ（Charles Wesley, 1707-88）のウェスリ派（メソジスト派）の信仰復興運動に始まるが，特に重要な宗教的一勢力であったのは，1790 年代から1830 年代にかけてである。フランス革命に端を発するフランスの動乱の一因は，宗教的な無関心や理神論的な合理主義，徹底した無神論にあると考えられたために，フランスの脅威に怯える英国人の多くが，以前ははやりであったそうした態度を破棄し，やや根本主義的な宗教に急いで立ち返ったからである。[11]

ナニートンに福音主義がもたらされた時期は比較的遅かった。1828年に福音主義的「真摯さ」(seriousness) をもったジョン・エドマンド・ジョーンズ（John Edmund Jones, 1797-1831；「ジャネットの悔悟」["Janet's Repentance," 1857]中のエドガー・トライアン[Edgar Tryan]のモデル）がナニートンの教会（Nuneaton Parish Church）で連続夜間講義を行ったのがそのはじまりである。彼の講義はその古い教会を英国国教徒と非国教徒双方の真摯な聴衆で満たし，ナニートンに大いなる宗教的覚醒を引き起こした。当然のことながら，マライア・ルイスもジョーンズ氏の熱心な信奉者の一人であった。[12] このマライア・ルイスの下にあった4年間，メアリ・アンは彼女を範として繰り返し聖書を読み，さらには自己省察の習慣を身につけるようになったのである。

(ii) 第一の宗教的回心：禁欲的・自己否定的福音主義教徒

この真摯な宗教的態度の傾向は，メアリ・アンが1832年から移ったコヴェントリの非国教徒の寄宿学校（Miss Franklins' School）で吸収したカルヴィニズムによって一層助長されることになる。この学校での宗教生活は常に真摯なもので，毎日曜日には，全生徒がカウ・レイン・チャペル（Cow Lane Chapel）でフランクリン姉妹の父親でバプティスト派の牧師フランシス・フランクリン（the Reverend Francis Franklin;『フィーリクス・ホールト』[*Felix Holt*, 1866]のルーファス・ライアン[Rufus Lyon]のモデル）の説教を聞き，また平日には生徒たちが礼拝集会を組織するなどしていた。メアリ・アンはそうした集会のリーダーを務める生徒の一人であったと言われている。

こうした生活の中で，メアリ・アンはゴードン・S・ハイト（Gordon S. Haight）が宗教的回心と呼んでいる

ものを経験する。[13] マライア・ルイスの宗教は温厚で感情に訴えるものであり，地獄の業火よりもむしろ，愛と救いを強調するものであった。それゆえ，彼女がメアリ・アンに吹き込んだ福音主義は，初期のウェスリ派の教えのように，寛大な慈善というものだったのである。[14] 一方，フランクリン氏はバプティスト派のなかでも，より自由主義的な立場に与する牧師であったが，その自由主義的なバプティスト派の信条は，英国国教会のより厳格な福音主義派に近いものであった。メアリ・アンがフランクリン姉妹の学校に来てから3年目，彼女が15歳の誕生日を迎えた頃（1834年），突然にしかも激しく，「福音主義的な宗教的回心の経験」[15] ——人間は全く罪深い存在であり，キリストの贖罪を受け入れることによってのみ地獄から救われうる，という確信——がメアリ・アンを襲う。もともと衣装に凝ったりするなどという虚栄にふけることのあまりなかったメアリ・アンではあったが，今や自己の魂の状態への顧慮を第一として，身だしなみなど顧みなくなり，慈善活動には一層熱烈に励み，カルヴァン主義的により禁欲的・自己否定的になったのである。ただし，このようにコヴェントリでの宗教体験がメアリ・アンに多大な影響を与えたことは確かであるが，彼女が特にバプティスト派の教義に関心を示したということはなく，彼女自身は常に自分のことを英国国教会の一員と見なしていたのであった。[16]

当時のメアリ・アンの禁欲的信仰を例証する，あるエピソードが伝えられている。1838年8月，兄アイザック（Issac, 1816-90）と一緒に初めてロンドンを訪れ，そこに一週間滞在した際，メアリ・アンは兄が誘ってもどうしても芝居見物に行こうとはせず，夜は一人で読書をして過ごしたのである。[17]

(iii) 聖書の不可謬性と来世信仰：「この幕屋を」

メアリ・アンの最初の発表作品「この幕屋を」は，このエピソードから1年足らずして書かれたことになる。マライア・ルイスへの手紙によると，先に触れた，孤独な散歩の折，「われらの殉教者の一人の言葉」[18] がメアリ・アンの心に浮かんだことがきっかけでできた詩であるという。この詩のタイトルとして掲げられている，「ペテロの第二の手紙」第1章14節「この幕屋を脱ぎ捨てる時が間近であることを知っている」が，その殉教者の言葉であろう。

「主よいずこへ？（トミネ・クゥオ・ヴァディス）」の伝説によれば，聖ペテロはアッピア街道でキリストの幻に出会った後，ローマに引き返し，逆十字架にかけられて殉教したという。[19]「ペテロの第二の手紙」は，自らの死を予期したペテロの遺言書という特徴を持つものであり，この詩のタイトルとしてメアリ・アンが引用している聖句中の「幕屋（tabernacle）」とは，魂の仮の宿としての，朽ちる肉体の意であり，「幕屋を脱ぎ捨てる」とは死を意味する，美しい聖書的表現である。[20]

この「幕屋を」の詩の中で，「わたし」は「小さなささやき」として聞こえてきた天からの「命令」に従順に従い，「この輝ける，美しい世界」のものたちに別れを告げようとする：

野原を夕暮れの明かりでさまようとき，
わたしには一つのか細い，小さなささやきが聞こえる——「こちらへおいで！
お前はこの輝ける，美しい世界に間もなく告げねばならない
さようならを！」

その命令にわたしは従いたいと思う，わたしのランプを用意し，
わたしの衣服をしっかりとまとい，わたしの魂に祈りを捧げ，
そして　地上と地上の空気を呼吸するすべてのものに告げたいと思う
さようならを！
（第1-2連）[21]

「太陽」（第3連）をはじめとする天空の星たちから地上の動植物，水中の魚たちを経て，「守銭奴のように，こっそりとその数を数えたり，/ そのためなら　愛も健康も友情も平安も売り渡したりした　本たち」（第7連），さらには「親愛なる親族の者たち」（第9連）へと別れが述べられていく。「わたし」にとって一番身近なものに次第に焦点が絞られていく形で次々と「さようなら」が繰り返されていくのである。

メアリ・アンの読書好きは生涯つづくものであるが，当時の彼女は，日毎かさばりゆく世事や家事等に追われながら，無秩序に本を読みあさり，彼女の頭は「古今の歴史の雑多な見本，シェイクスピア（William Shakespeare, 1564-1616）やクーパー（William Cowper, 1731-1800），ワーズワース（William Wordsworth, 1770-1850），ミルトン（John Milton, 1608-74）から集められた詩の抜粋，新聞の話題，アディソン（Joseph Addison, 1672-1719）やベイコン（Francis Bacon, 1561-1626）の断片，ラテン語の動詞，幾何学，昆虫学と化学，書評と形而上学，の寄せ集め」を呈していたという。[22] 書物に対する別れが，「親愛なる親族の者たち」を除けば，一番最後に述べられているのはいかにもメアリ・アンらしい。

更に注目すべきは，「紛れもない真理が記された」ものとして，「聖なる書物[聖書]」だけには別れを告げないと断言している点である。

聖なる書物よ！その書物の紛れもない真理が記された頁は，ひとたび知ってしまえば，
天国の光輝の前でも地獄の嘆きの前でも色あせることはない，
この地上の贈り物の中で，汝だけには　わたしは告げない，
さようならを！
（第8連）

天の都新しいエルサレムでも聖書を必要とするという，この考えに対しては，『クリスチャン・オブザーヴァー』誌の編集者が，幾分非正統的な見解として，わざわざこの箇所に以下のような注を付している：

わたしたちはたびたび詩に注を加えることをするわけではありません。けれども，もし聖ヨハネが天の都新しきエルサレムの中に聖堂を見出さないとすれば聖書も必要ないでしょう[黙21:22]。というのも，わたしたちはそのとき鏡で見るようにおぼろに見る[Iコリ13:12]——つまりサクラメントや書き記された神の御言葉という帳（とばり）を通して見る——のではなく，顔と顔を合わせて見る[Iコリ13:12]ことになるからです。聖書は神の贈り物です。しかし，天国で使用するためのものではありません。わたしたちが地上のあらゆるものに別れを告げてしまった後，いまやまさに天国に入ろうとするとき，わたしたちはなおも聖書にすがりつくかもしれません。そしてこのことを，おそらくM. A. E. [Mary Ann Evans]は意味しているのです。[23]

はたして，この注の最後の部分で『クリスチャン・オブザーヴァー』誌の編集者がコメントしているような意味で，メアリ・アンが聖書だけには別れを告げないと述べているのかどうか，その点ははっきりとは判らない。しかし，「紛れもない真理が記された」ものとして聖書の不可謬性を堅く信じて動じない彼女の姿が表明されている。

そしてメアリ・アンは，死の影の恐怖を払拭する天国での復活，すなわち，来世および霊魂不滅（不死）の信仰を高らかに宣言して，この詩を閉じているのである：

主がわたしにお与えになった，親愛なる親族の者たちよ，
わたしたちを結び付ける親愛なる絆は，いまや裂かれねばならないのだろうか？
いやそうではない！わたしたちが天国でまみえるまでの間だけ　わたしは告げるのだ，
さようならを！
そこではわたしの新たに生まれ変わった感覚が新たな喜びを見出し，
新たな音，新たな光景がわたしの目と耳を惹きつけることになるであろう，
だから　恐れることはないのだ　この世に悲しい影を落とすあの言葉，
さようならを！
（第9-10連）

この短詩は，宗教詩としては革新的なものを含まぬ，「月並み型の」[24] ものかも知れない。だが，唯一の指針としての聖書の不可謬性とキリスト教的な霊魂不滅の信仰がかざらずに吐露されたものとして，福音主義のキリスト教徒としての若きメアリ・アンの姿をよく伝えてくれる作品といえよう。

(iv)「見ゆる教会」に対する「揺れる判断」

聖書を個人的指針として重んじるのは福音主義派の特徴とはいえ，「この幕屋を」の詩に窺える，メアリ・アンの幾分非正統的といえる程の聖書尊重の態度の背後には，オックスフォード運動の間接的影響があるのではないだろうか？

1830年代末といえば，英国では『時局小冊子』の発行（1833-41）が最高潮に達しつつある時期にあたる。福音主義が個人の道徳と個人による聖書の受容を主張したのとは対照的に，オックスフォード運動は教会の権威ということを主張した。地上の教会——神学用語でいう「見ゆる教会（the visible church）」——の在り方が問題となっていたわけである。そしてトラクト運動の主唱者たちは，その論法として歴史に訴え，教会と教理に発展という概念を適用し，教会は国家と同様，完成した制度ではなく，歴史と共に成長してゆく有機体，何世紀にもわたる発展の所産であり，教理も同様に信仰の条件の変化によって成長し変化する一つの有機体である，と主張したのであった。

なるほどオックスフォード論争は，当時の社会的騒乱や政治的危機からはかなりかけ離れた宗教論議であり，庶民の興味をひくものではなかったかもしれないが，その論争は決して牧師の学者グループに限られていたわけではなかった。宗教書などを読み，複雑な聖書解釈の歴史や神学論争に興味をもっている，中産階級の人々がかなりいたからである。[25] メアリ・アンはまさにそうした中産階級の人々の一人だったのであり，毎日聖書を読み，聖句を精密に研究していただけでなく，『時局小冊子』を含む様々な宗教的な書物も読みふけっていた。例えば，マライア・ルイスに宛てた，この時期のある手紙（1839年5月20日付）には，種々の宗派の聖職者の宗教的著作

——独立派（会衆派）の牧師でユニヴァーシティ・カレッジの哲学・論理学教授ジョン・ホパス（John Hoppus, 1789-1875）の『教会の統一に対立する分裂』（*Schism as Opposed to Unity of the Church*, 1839）と英国教会の福音主義聖職者ジョウゼフ・ミルナー（Joseph Milner, 1744-97）の『キリスト教会の歴史』（*History of the Church of Christ*）,[26] トラクト運動の擁護者グレズリー師（the Rev. W. Gresley, 1801-76）の『一英国国教徒の肖像』（*Portrait of an English Churchman*, 1838）[27]——を，それぞれの著作の長所を相対的に認めながら読み進んでいるメアリ・アンの姿が窺える。と同時に，『時局小冊子』の著者たちに関しては，彼らの広い学識や熱意や献身は認めながらも，ローマ・カトリックとの親近性を匂わす彼らの所説や試みに対する彼女の反感も吐露されている。[28]

このように，オックスフォード運動が活発化させた宗教論議の刺激を受けて，種々の宗教的著作を読み進んで行くなかで，聖書の不可謬性に対する信仰は揺らぐことはなかったものの，「見ゆる教会」に対しては，メアリ・アン自身大きな動揺をきたすようになっていく。上述の手紙（1839年5月20日付）にはそうしたメアリ・アン自身の「揺れる判断」[29]が次のように言及されている：

> 「見ゆる」教会（the *visible* church）の本質ほど，わたしがしばしば羅針盤の全方位にわたって向きを変えた問題はありません。わたしはある方位に強く心惹かれますが，そこに決めようとすると，それに反対する様々な主張がでてきてわたしの立場を揺るがすのです。わたしはその詳細に立ち入ることはできませんが，わたしたちが一緒のときに……もし聞いて下さるならば，わたしの抱えている困難な問題のすべてをあなたにお話しします。[30]

この時期における，「見ゆる教会」に対する「揺れる判断」ゆえに，唯一の拠り所として聖書を尊ぶ福音主義的傾向がメアリ・アンにおいて一層助長され，幾分非正統的と言えるほどの聖書尊重の姿勢を示唆する詩句を吐露させ，『クリスチャン・オブザーヴァー』誌の編集者に注を付加させることになったのかもしれない。いずれにせよ，「揺れる判断」を引き起こした，メアリ・アンの抱える「困難な問題」は，コヴェントリのフォウルズヒル（Foleshill）への移転を機に，急速にその鋭さを増し，ついには聖書の不可謬性に対する信仰をも揺るがし，第二の，そして，決定的な宗教的回心へと彼女を導いていくのである。

III　汎神論的傾向

(i)「聖戦」

「この幕屋を」に引き続いて，メアリ・アンは1839年9月4日に「距離のもつもの柔らかに潤色する力」("Sonnet," l. 12）を主題にした「ソネット」("Sonnet") と題された詩をマライア・ルイスに書き送り，それから1年あまり後の1840年10月1日にはドイツ語の小詩（Aug. Mahlmann, "Frage und Antwort"）を彼女自身が英訳した翻訳詩「問いと答え」("Question and Answer") を同じくマリア・ルイスに書き送っている。[31]

「ソネット」という詩は後年のエリオットのピクチャレスク批判との関連でとりわけ興味深いものではあるが，メアリ・アンの宗教という観点からいってより注目すべきは，翻訳詩をはさんで，次作となる「人間に対する自然の豊かな貯えの中に」（以下，「人間に対する」）である。この詩は1842年2月18日にマライア・ルイスに宛てた手紙のなかに書かれていたものである。

1842年2月といえば，キリスト教信仰をめぐる父親との確執——メアリ・アンが「聖戦」[32]と呼んでいるもの——の真っ只中で苦悩している時期にあたる。父親のロバート・エヴァンズが隠退して，土地管理人の仕事と住居のグリフ・ハウスをアイザックに譲り，メアリ・アンとともにコヴェントリのフォウルズヒルに引っ越してきたのが1841年3月のことである。11月に自由思想家で事実上の無神論者であり骨相学者でもあった裕福なリボン製造業者チャールズ・ブレイ（Charles Bray, 1811-84）や彼の義弟でユニテリアン派の学究的な商人チャールズ・ヘネル（Charles Hennell, 1809-50）たちからなるコヴェントリの知的エリートの小グループと知り合い，交遊を深めるなかで，メアリ・アンの精神生活に決定的転機が訪れる。特にヘネルの著書『キリスト教の起源についての研究』（*An Inquiry concerning the Origins of Christianity,* 1838）は，「福音書の記録において，事実と仮構，歴史と奇跡を引きはなす試み」[33]を展開し，聖書の不可謬性を否定するもので，その転機に重要な影響を与えた。ヘネルが高等批評として知られるようになる批判的考察を独自に展開したこの著書をメアリ・アンはすでに読んでいたが,[34] ブレイらと知り合い，あらためて興味深く熱心に読み直し，彼女の宗教的回心が一気に加速されたようである。[35]

このようにしてキリスト教信仰を放棄するに至ったメアリ・アンは，ついに1842年1月2日，教会に行くことを拒否して父親との対立を引き起こし，以後，5月半ばまで「聖戦」が続くことになるのである。

1月28日にはブレイの妹（Mrs. Abijah Hill Pears）にあてて，メアリ・アンは自己の心境を次のように吐露している：

> わたしが，わたし自身の反響だけに耳を傾け，わた

し自身の側にのみ賛成を読みとり，不賛成に対してはこの上なく都合良くつんぼになろうという尊大な決意をして，淀んだ溜まり水のようになるのではないかと心配なさらないでください。皆が実際にこの一般原則を拒否してくれればよいのに！どんな命題であれ，それを調べることを恐れることは知的・精神的麻痺であり，それはつねに何であれ，実体の堅固な把握を妨げることになるようにわたしには思われます。わたしとしては，真理の聖墓を強奪の支配から解放しようとする，あの栄光ある十字軍の仲間に加わりたい。そうすれば，わたしたちは彼女[真理]の復活を見ることになるでしょう。とはいえ，わたしの行動原理のなかに，永遠の罰への恐れ，予定された救済への感謝，報いとしての未来の栄光の啓示を加えることはできませんが，この世の，あるいは，あの世の唯一の天国は，至高なるもの[神]の意志――あの完全なる理想，つまり，唯一の父なる神の胸のなかに宿る真のロゴス，の達成を絶えず目指すこと――を遵奉することのなかに見出されうるという信念には，わたしは全面的に与します。[36]

この手紙で表明されている，キリスト教的な来世および霊魂不滅（immortality）の教義の否定と「真のロゴス」（以下に引用する手紙の言葉を使えば「イエス自身の道徳的教え」の本質）の肯定は，メアリ・アンの第二の回心の要諦をなすものである。[37]

この手紙から一ヵ月後の2月28日，教会への出席をめぐってなおも対立が続いている父親に対して，メアリ・アンは口頭ではなく，文書で自分の心情を次のように訴えている：

わたしはこれらの著作（旧約・新約聖書）を事実と虚構が混在した歴史書と見なしています。イエス自身の道徳的教えであったとわたしが信じているものの多くを崇拝し大切にしますけれども，キリストの生涯の諸事実に基づいて作られ，そしてその材料に関して言えばユダヤ人の諸々の考えから引き出された，教義体系というものは，神にとってこの上なく不名誉なものであり，個人的・社会的幸福に与えるその影響という点ではこの上なく有害である，とわたしは見なしています。……以上がわたしの強い確信でありますので……自分が全面的に否定する礼拝に参加するふりをわたしがすることは，大いなる偽善を犯して自己の利益になると思われるもののために世間の微笑に惨めに追従することにならざるを得ないでしょう，このことは妥協を許さない高潔な心をもった者には疑問の余地のないものです。このこと，このことだけは，たとえお父様のためでも，わたしはご免こうむります――ほかのことなら何でも，どんなにつらくても，お父様に一瞬でも喜んでいただくためなら，わたしは進んで立ち向かう所存です。[38]

結局メアリ・アンのこの訴えは聞きいれられず，父親のロバートは3月3日には娘との別居を計画するにいたるが，周りの者の忠告を受け入れて，メアリ・アンを一時，グリフの兄のもとへやることにする。

メアリ・アンは同月23日から4月末までグリフに滞在し，最終的には周りの人たちの仲裁を受け入れた妥協案の成立によって，4月30日ふたたびコヴェントリの父の家へ戻ってくることになる。その妥協案とは，娘のメアリ・アンは教会へ礼拝に行くことによってしきたりを守るが，自由に好きなことを考えて良いというものであった。[39]

かくして，5月15日メアリ・アンは再び父親と教会に出席し，五ヵ月あまりに及んだ「聖戦」は一応の終結をみるのである。

(ii) 自然物とのワーズワース的な愛の交感：「人間に対する」

キリスト教信仰を放棄したこの時期，メアリ・アンは4月11日付の手紙に窺えるように，キリスト教信仰に代わるものとして，汎神論（pantheism）への傾倒を見せている：

不死（immortality）こそ，人間をして高尚で英雄的な美徳を生じさせたり最も崇高な忍従を行わせたりするのに絶対不可欠なものであるという確信をわたしは抱くことができません。啓示という概念が放棄されると常に汎神論へ向かう傾向があり，神の人格はキリスト教を離れては十分満足いくようには擁護され得ないと，わたしもコールリッジと同様に感じます。[40]

この手紙が書かれる，およそ一ヵ月半前頃に作詩されたと考えられる短詩「人間に対する」は，「揺れる判断」の頃からコールリッジ（Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834）を含むロマン派詩人たち――とりわけワーズワース――の作品に親しむようになっていたメアリ・アンが，キリスト教信仰の放棄とロマン派の影響の下で育んでいく，一種の汎神論的傾向を伝える小品となっている。[41]

ごく短い詩なので，全文をまず掲げておこう。

「人間に対する自然の贈り物の豊かな貯えのなかに
各人は　見事な連想が生みだす黄金の連環によって

めいめいの魂と固く結ばれた，
めいめいの愛するものをもつ。
〈偉大なる霊〉が世界に命じて
知性をそなえた意識あるものに満ちるようにさせるように，
そのように　その霊の小型の似姿たる人間は
この世の森羅万象に　もの言う魂を，
すなわち　人間精神の泉から流出したものを，
人間精神固有の印章の真の刻印を，付与する。
ここにこそ　人間は見いだす　汝（＝偉大なる霊）の最良のかたどりたる，共感を！」

この詩に使用されている用語や表現は，キリスト教に関連したものも認められるが，概ね，コールリッジやワーズワースによって代表されるロマン派に関連したものである。[42]

まず，第2行の「見事な連想（associations）が生みだす黄金の連環」という表現は，コールリッジやワーズワースに影響を与えたハートリー（David Hartley, 1705-57）らイギリス経験論哲学者の「連想」（association）の概念を想起させるものであろう。

第5行から第7行で述べられている，「〈偉大なる霊〉」と「知性をそなえた意識あるもの」すなわち「人間」との関係は，「創世記」の第1章26-28節の天地創造神話の一節を想起させるが，一方，第9行の「流出したもの（An emanation）」という用語は，新プラトン主義的ないしスコラ哲学的な含意を持っている。すなわち，この詩において，この言葉は第一義的には人間の精神活動を指して使用されているけれども，「〈偉大なる霊〉」と「人間」は「似姿」つまり相似関係で結ばれる存在であるゆえに，この言葉は万物の創造を司る「〈偉大なる霊〉」の働きをも間接的に指し示すものとなる。その意味では，コールリッジに影響を与えたと言われている新プラトン主義者プロティノス（Plotinus, 205?-270）の一元論的汎神論（別名，流出説[Emanation Theory]）ないしはスコラ哲学的な創造神の流出説を想起させるものであろう。

更にこの用語との関連で注目すべきは，「人間精神の泉から流出したもの」とは「もの言う魂」，「人間精神固有の印章の真の刻印」のことであり，これらのものを「この世の森羅万象」（＝自然物）に「付与する」働きが「〈偉大なる霊〉」の「最良のかたどりたる，共感（sympathy）」である，と述べられている点である。ここにはロマン派的な創造的感性（creative sensibility）が示唆されていよう。というのも，自然物に付与された「もの言う魂」とは，「人間精神の泉から流出したもの」として，ワーズワースの言葉を使えば，人間精神の主観的力が「半ば創造（half create）」[43] したものと見なすことができるからである。

翻って，自然に対する知覚や認識に人間の主観の能動的力の作用を強く認める，この創造的感性の立場ゆえに，先に指摘した「見事な連想が生みだす黄金の連環」とは，単にハートリーらの受け身的で機械論的な連想作用を意味するのではなく，自我の能動性が加わった積極的な愛の行為――すなわち，この詩の最終行で述べられている，創造的感性に基づく「共感」の作用――を意味するものと解されねばならなくなる。

だとすれば，「人間に対する自然の贈り物の豊かな貯えのなかに」，各人がもつことになる「めいめいの魂と固く結ばれた，/ めいめいの愛するもの」との，この「共感」は，自然物とのワーズワース的な愛の交感――「不言の言（An inarticulate language）を語るものたち[自然物]」との「静かな交感（quiet sympathies）」[44]――の一種と見なせることになろう。そしてこのようなワーズワース的要素に注目するとき，この詩でうたわれている「〈偉大なる霊〉」を，ワーズワースの言う，自然に内在する「ある霊的存在（A presence）」[45]――いわゆる「世界霊（anima mundi）」に相当する，汎神論的存在――と見なすことも可能となってくる。結局のところ，この「〈偉大なる霊〉」とは，キリスト教的な創造神の要素も看取されはするものの，汎神論的傾向がまさった霊的存在と言えるであろう。

以上見てきたように，この短詩は，キリスト教的というよりも汎神論的傾向を色濃く内包し，自然物とのワーズワース的な愛の交感――創造的感性に基づく「共感」――を称えた詩である。「この幕屋を」の詩では，「わたし」は「天国」での生を享受するためにこの世の自然物に進んで「さようなら」を告げていた。一方，この「人間に対する」の詩では，その自然物との「共感」（＝「見事な連想が生み出す黄金の連環」）に基づく結合こそが賛美されている。キリスト教信仰の放棄にともない，前者の詩の来世（otherworldliness）の賛美は後者の詩の現世（worldliness）の賛美にとって替わられ，以後，メアリ・アンの宗教はこの現実世界重視の人間主義的側面を深めていく道を進むことになるのである。

この点からいえば，この短詩にその影響が明らかに窺えるワーズワースとは好対照をなす。彼の「魂の経路」は，概略すれば，自然物との愛の交感によって「自然への愛」から「人間への愛」[46]へと至る初期の人間主義的信仰の段階から，汎神論的な「世界霊」の自然神秘主義的信仰を経て，後期のキリスト教信仰の段階へと変遷し，メアリ・アンが辿る軌跡とは正反対をなすからである。メアリ・アンはワーズワースの詩の後期から前期の作品へと至るベクトルの中に，彼女自身の「揺れる判断」の指針を見いだし，ワーズワースへの愛着を深めていったのであろう。

なお，この短詩でうたわれているのは，すでに指摘し

たように，「人間」と「人間に対する自然の豊かな贈り物」（＝自然物）との「共感」であり，その「共感」は主として「自然への愛」のことを指しているように見えるが，「人間に対する自然の豊かな贈り物」のなかに自然界の一部としての人間自身も含まれていると考えるべきであろう。「人間に対する自然の豊かな贈り物」と同じ意味で使われている「この世の森羅万象」と訳した言葉は，その原語を示せば "matter's every form" である。直訳すれば「もののあらゆる形象」の意であり，人間をも含めた自然界の一切のものの形象を指していると解すべきであるように思われる。だとすれば，この「共感」にはすでに「人間への愛」も潜在的に含まれていることになる。

やがて，この第二の宗教的回心の帰結として，フォイエルバッハ（Ludwig Andreas Feuerbach, 1804-72）やコント（Auguste Comte, 1798-1857）を介して，より徹底した人間主義的宗教を信仰する段階に至ったとき，メアリ・アンは「人間への愛」を前面的にうたいあげることになるのである。

IV　人類教：「おお　願わくはわたしも加わりたい見えざる聖歌隊に」

(i) 宗教的回心の帰結

父親の死（1849年）と前後して，メアリ・アンは二つの大きな翻訳の仕事をしている。一つはドイツ高等批評の最も重要な成果の一つであるシュトラウス（David Friedrich Strauss, 1808-74）の『イエスの生涯』（*Das Leben Jesu,* 1835-36）の翻訳である。

もともとルーファ・ブラバント（Rufa Brabant）が着手していたこの翻訳をメアリ・アンが引き受けたのは1844年である。それから2年あまりに及ぶ苦労の末，ようやく翻訳が完成し，1846年に*The Life of Jesus, critically examined*として刊行された。ドイツ語の原書で1500頁におよぶこの大著を，メアリ・アンは調子の良いときには一日6頁の割合で翻訳していったが，時にははた目にもその疲労困憊ぶりはあきらかで，そのような折には友人から「シュトラウス病にかかって」いると称されている。「磔刑の美しい物語を解剖すること」がメアリ・アンの健康を損ない，彼女の部屋に置かれ，飾られていた「キリストの像と絵を見ることだけがそれに耐えさせた」と伝えられている。[47]

シュトラウスの本は福音書の記述に神話と歴史の混在を認めるもので，このような高等批評的見解自体はすでにヘネルの本をとおして1841年末にはメアリ・アンが到達していたものであった。それゆえ，この翻訳はメアリ・アンの知性と彼女に秘められた知的作家になりうる可能性の片鱗を公にすることに貢献したが，彼女の宗教的回心に新しいものを付け加えるものではなかったと言える。

メアリ・アンの宗教的回心という観点からいってより重要なのは，フォイエルバッハの哲学書『キリスト教の本質』（*Das Wesen des Christentums,* 1841）の翻訳である。

父親の死後，ロンドンで『ウェストミンスター・レヴュー』（*Westminster*）誌の副編集長として腕をふるい，[48]また自ら評論などを執筆したりして，ジャーナリズムの世界に身を投じていたメアリ・アンは，フォイエルバッハの本の翻訳に1853年に着手し，1854年*The Essence of Christianity*として刊行した。フォイエルバッハの人間学は，超越的人格神に対する信仰を人間の自己疎外としてとらえ，「人間こそ真の神であり，救世主なのである」と主張し，「人間は人間にとって神である」と宣言する。[49]人間に始まり，人間で終わる，この徹底した人間主義的宗教に，メアリ・アンは全面的に同意し，彼女の第二の回心の帰結点を見出すのである。

またこの頃，メアリ・アンはG.H.ルイス（George Henry Lewes, 1817-78）と親密になり，熱心なコント主義者であった彼を介して，また，ハリエット・マーティノー（Harriet Martineau, 1802-76）による簡約版の翻訳『実証哲学』（*Positive Philosophy,* 1853）などをとおして，コントの影響も幾分受けるようになる。[50]

コント主義は大きく二つの側面をもっている。その一つは実証主義（Positivism）と呼ばれる新しい哲学である。これは18世紀以来確実に地歩を固めてきていた世界認識の一方法が頂点に達したものと見なされるもので，正当化されうる唯一の知識は科学的な観察と実験によって得られたものであり，それゆえ，神という概念を放棄して科学から得られるものの追求に人間の活動を限定すべきである，と説く哲学である。他の一つは，その放棄された従来の神の代わりになるものとして，コントにより新たに創始された宗教である。それは人類を崇拝の対象とし，カトリック教会をモデルにした崇拝様式を有するもので，人類教（the Religion of Humanity）とも呼ばれる。

メアリ・アンは実証主義に関しては同意したが，特有の教会と儀式を有する人類教に関してはある距離を置いていた。彼女はその信奉者たちや教会と関係を持つことはあっても，積極的に関与することはなかったのである。偉大な小説家として名声を博したエリオットが死去したとき，彼女の個人的信仰が何であれ，その埋葬式はG. H. ルイスの時と同様，ユニテリアン派の儀式に従ってなされたのであった。[51]

じつは人類教という用語には二つの用法がある。狭義にはコントによって創始された新しい宗教を指すが，広義には古い宗教の超自然的根拠をすっかり放棄しながらも古い宗教の倫理的教えは救い出そうとする様々な試み

を指す。[52] フォイエルバッハの説く宗教もこの広義の意味で人類教と呼ばれうるものである。メアリ・アン自身が最終的に到達した宗教は，フォイエルバッハの人間学，コントの実証主義，ワーズワース的な共感の思想などが融合した人間主義的宗教としての広義の人類教なのである。父親の死から10年後の1859年12月，友人に宛てた手紙のなかで，小説家となってまだ間もないエリオットは，彼女が到達した人間主義的な広い宗教観を次のように述懐している：

> 10年の経験はあの内的自我に大きな変化をもたらしました。人間の悲しみと，純粋さを希求する人間の欲求とが表現されている信仰ならば，どんな信仰に対してもわたしはもはや敵意はもっておりません。それどころか，すべての論争的傾向にまさる共感をもっています。……私たちの最高の感情の対象と適切な領域は苦闘する人間同士であり，この現世の生活なのです。[53]

(ii) 人類教の賛歌

エリオットの人類教が最も明白に表明されている詩として，「おお　願わくはわたしも加わりたい　見えざる聖歌隊に」（以下，「おお　願わくは」）を挙げることができよう。この詩は1867年8 月に執筆され，1874 年『ユバルの伝説とその他の詩』（*The Legend of Jubal and Other Poems*）の掉尾を飾る作品として発表された。同詩集の一番最後におかれてその重要性が強調されているこの詩は，エリオットにとって，テニスンにとっての「砂州を越えて」（"Crossing the Bar," *New Poems*, 1867）やブラウニング（Robert Browning, 1812-89）にとっての『逍遙篇』の「エピローグ」（"Epilogue" to *Asolando*, 1889）のような意義をもっている。[54] つまり，一種の辞世の句となりうる内容を含んでいるのである。実際，1880年末にエリオットが死去したとき，彼女の葬儀において牧師によって引用されたのがこの詩の一節であった。[55] また，ハイゲイトの墓地（Highgate Cemetery）にある彼女の墓石には，この詩の2行目と3行目（"Of those immortal dead who live again / In minds made better by their presence"）が墓碑銘として刻まれている。

エリオットの人類教が表明されているこの詩は，単にエリオット自身の信仰の表明としてきわめて重要なものというだけではない。その人間主義的信条ゆえに，この詩はコント主義者やユニテリアン派らによって彼らの賛美歌やアンセムとしても受け入れられ，更にはより世俗的な音楽用にも作曲がなされ，エリオットの詩の中で最も人口に膾炙したものとなっている。[56] 今日，「見えざる聖歌隊に加わる（join the choir invisible）」という英語表現は，「天国に入る，死ぬ」ことを婉曲的に意味する慣用句になっているが，この慣用句はそもそもエリオットのこの詩に由来しているのである。

さて，この詩のタイトル「おお　願わくはわたしも加わりたい　見えざる聖歌隊に」およびエピグラフとして引用されているキケロの言葉（「この世での短いわが生よりも，死後の長い来世のことを，わたしは気にかけている。」）だけでも十分に明らかなように，この詩で扱われているのは主として来世の生の問題である。この詩において，エリオットは神の聖歌隊[57]というキリスト教神秘主義思想の伝統的概念を見事に換骨奪胎し，そして来世・天国というキリスト教的概念を徹底して人間主義化・世俗化してエリオット流に定義し直し，彼女の人類教を高らかにうたいあげている。

この詩は次のような書き出しで始まる：

> おお　願わくはわたしも加わりたい，あの不滅の故人たちからなる
> 見えざる聖歌隊に　かの故人たちは再び生きている
> この世での彼らの存在によって　より善良になったひとびとの心の中に：
> 寛大な心へと覚醒していったひとびとの鼓動の中に，
> 勇敢で正直な行ないの中に，
> 利己主義で終わるあわれな目的を軽蔑する心の中に，
> 星のごとく夜の闇を貫き，穏やかに粘り強くより大きな問題へと
> 人間の探求をかりたてる崇高な思いの中に。
> 　　そのようにして生きることが
> 天の至福というもの：
> この世に不滅の音楽をかなで，
> 人間の成長し高まりゆく生を　成長し高まりゆく力によって支配する
> 麗しい秩序として息づいていることが　天の至福というもの。
>
> (ll. 1-13)

第2 行中の「見えざる聖歌隊（the choir invisible）」とは，神学用語の「見えざる教会」，「見ゆる教会」を踏まえた表現であろう。「見ゆる教会」とは，既に触れたように地上の教会のことで，メアリ・アン自身が20歳頃，「揺れる判断」で悩んだ問題であった。一方，「見えざる教会」とは天使や天上の聖人からなるもの，ないしは，地上と天上の真のキリスト者からなるものを指した。そして「見ゆる教会」には悪しきキリスト者も含まれるが，「見えざる教会」こそ真のキリスト者からなる真の教会であるとされる。[58] それゆえ，「見ゆる聖歌隊」が地上の聖歌隊を指すのに対し，「見えざる聖歌隊」は天使と

天上の聖人たち，ないしは，天上と地上の真のキリスト者からなる真の聖歌隊を指すと言えよう。

しかし，この詩では超越的な天国と来世の存在は否定され，代わって，死後も現世に生きている人々の心の中に善なる感化力として記憶され，思い起こされていくこと――エリオットの言葉を用いれば，あの世ではなく，「この世に不滅の音楽をかなで」，「麗しい秩序として息づいていること」――が「不滅の故人」として「見えざる聖歌隊」に加わり，「天の至福（heaven）」に与ることの真の意味である，と主張されている。そして「人間の成長し高まりゆく生」，「成長し高まりゆく力」という表現には，人間の漸進的進歩に対するエリオットの信仰が表明されているといえよう。

続く詩行において，神の本質が述べられている。神とは，すなわち，人間性の良き面が心の中に想像した「一つのより尊敬すべき姿（イメージ）」（l. 27）であり，それが「明確な形象」を与えられ，崇拝の対象として愛をもって崇められるようになったものである，と。つまり，神を崇拝することは人間性の良き面を崇拝することであり，神を愛することは人間を愛することに他ならないのである。まさにフォイエルバッハやコントが説いた，「人間は人間にとって神である」とする人間主義的宗教観の要約をそこに認めることができよう：

> ……あこがれの歌のなかで敬虔に涙を流し，
> 不易不変なものと
> いつかより良くなりうる変更可能なものを　苦労してたどりながら
> この世の重荷を軽くしようと待ち構える，
> われらが自己のたぐいまれなる，良き，真実なる面は　こぞって――心の中に見たのだ
> その聖所にふさわしい一つのより尊敬すべき姿（イメージ）を，
> そして　それに明確な形象を与え
> 神々しいまでの人間として庶民の前に描き出し，かくして崇拝の念を呼び起こし
> その崇拝をより一層愛と一つになった　より崇高な崇敬の念にまで高めたのだ――

言うまでもなく，この詩でうたわれている不滅性（immortality）は，現世の人々の記憶や思いの中に宿る「主観的な不滅性（subjective immortality）」[59] と称すべきものである。それゆえ，それは決して永遠のものではなく，最期には消滅していく運命にある。「不滅の故人」として「見えざる聖歌隊」に加わり，現世の人々の記憶・思い出の中に「来世の生（life to come）」（l. 36）を生きることになる，「われらが自己のたぐいまれなる，良き，真実なる面」も，その記憶・思い出の継続が消滅すれば，その不滅性も消滅してしまうことになるのである。ハーディ（Thomas Hardy, 1840-1928）のいう「完全なる忘却」による「第二の死（second death）」[60]の到来である。

もっともハーディが「彼女の不滅」（"Her Immortality," *Wessex Poems,* 1898）や「彼の不滅」（"His Immortality," *Poems of the Past and the Present*, 1901），「忘れられる運命の者たち」（"The To-Be-Forgotten," *Poems of the Past and the Present*）で問題にしている「第二の死」は個人的な思い出のレベルにとどまっているのに対して，エリオットは人類全体，地球の寿命というより大きな視野でこの問題を論じている。

とは言え，キリスト教的終末論などの神秘主義思想によらなくとも，人類の永続性や太陽系宇宙の永続性という前提はヴィクトリア朝にはもはや科学的に成立しなくなっていた。ダーウィン（Charles Darwin, 1809-82）説が種の絶滅という考えを提示し，死は生物の個体から種全体にまで適用されることになったからである。一方，将来，冷却による太陽の死は避けられないとするヘルムホルツ（Hermann von Helmholtz, 1821-94）の理論は，太陽の惑星の一つに過ぎない母なる地球の寿命に限りがあることを示すものであった。[61] にもかかわらず，この詩にはハーディの上述の詩に漂う「第二の死」に対する恐れや不安は見られない。自己を含めた人類全体の漸進的進歩に第一の関心があるエリオットは，彼女のいう「来世の生」が人類の絶滅，地球の死とともに消滅すること――詩のテクストでいえば，「人類の『時』がその瞼を閉じ，人類の空が巻かれて/ 永遠に読まれることのない/ 墓におさめられた一巻の巻物のようになってしまうとき」――に対して，なんら悲観することなく，それを進んで受け入れている。そして，その限りある現世世界と「来世の生」を一つの善なる「甘美な存在」となって生き抜き，「見えざる聖歌隊」が唱する「この世の歓喜」の音楽に加わりたいと宣言し，この詩を結んでいるのである：

> われらが自己の　その良き面は，生き続けるであろう
> 人類の「時」がその瞼を閉じ，人類の空が巻かれて
> 永遠に読まれることのない
> 墓におさめられた一巻の巻物のようになってしまうときまで。
> これが来世の生というもの，
> そして　その生を殉教者たちは　あとに従おうと努力するわたしたちのために
> 一層輝かしいものにしてきたのだ。願わくはわたしも
> その最も清らかな天の至福に到達し，他のひとびとの魂にとって

大いなる苦悩のときの力の美酒となり，
高潔な情熱を燃え立たせ，清らかな愛を育み，
いかなる無情さも含まぬ微笑みを生み出していきたい——
願わくは　一つの善なるものとなって広がり，
広がりつつ なお一層その強さを増してゆく　そういう甘美な存在となりたい。
そのようにしてわたしも加わるのだ　見えざる聖歌隊に
それが唱する音楽は　この世の歓喜。

(ll. 31-45)

エリオットの小説中には，「自暴自棄から救われ，聖なる希望によって強められ，そして今や清浄と有益な骨折りの年月を振り返っている」ジャネット・デムプスター（Janet Dempster）という「形見」[62]を残して逝ったトライアン氏（"Janet's Repentance," 1857）をはじめとして，ペストに病む地中海の小村を救って聖母伝説を残すことになるロモラ（Romola；*Romola*, 1862-63），「広く人目にはつかなかったとはいえ，見事な成果を結ん」で，周囲の者たちに「数えきれぬほどに広い」[63]影響を与えていったドロシア（Dorothea; *Middlemarch,* 1871-72），グウェンドレンの魂の支えとなりそして自らはユダヤ民族のために献身していくダニエル（Daniel; *Daniel Deronda,* 1876）など，一つの善なる「甘美な存在」となっていく人物が数多く見出される。ロモラやドロシア，ダニエルは作品の結末ではまだ故人とはなっていないが，すでに「他のひとびとの魂にとって/ 大いなる苦悩のときの力の美酒」となっている存在として，彼らは生きながらにして「見えざる聖歌隊」に参加している，いわばこの世の聖人たちと見なせよう。

メアリ・アンが「エイモス・バートン師の不幸」（"The Sad Fortunes of the Rev. Amos Burton"）を発表して小説家ジョージ・エリオットになったのは1857年である。第二の宗教的回心をほぼ完了し，自己の新たな信仰を確立していたエリオットは，次々と執筆していく彼女の小説のなかに，「おお　願わくは」の詩に結晶化して表明されている，彼女の現世重視の人間主義的信仰——エリオットの人類教——を繰り返し描き出していったと言えるのである。

最後に，エリオットの人類教との関連で，ワーズワースの「トゥーサン・ルーヴェルテュールへ」（"To Toussaint l'Ouverture," 1802）の詩に寄せた彼女の称賛を指摘しておきたい。この詩は，ナポレオン軍に捕らえられて獄中にあった，サン・ドマングの黒人奴隷の解放と独立の指導者トゥーサンを激励し称えるもので，ワーズワースの「ヒューマニズムの時期の最後を飾る名品」[64]と評される作品である。エリオットはこのソネットの「最終の８行ほど素晴らしいものはどこにもない」[65]と絶賛している。その最終の８行にうたわれている内容こそは，「おお　願わくは」のなかでエリオットが理想として掲げた聖なる存在——「一つの善なるものとなってなって広がり，／広がりつつ なお一層その強さを増してゆく　そういう甘美な存在」——としてのトゥーサンの姿なのである：

獄につながれながらも　むしろ晴れやかな顔をせよ。
たとえ汝自身は倒れ，二度と再び立ち上がることがかなわぬとも，
生きよ，そして次のことを慰めとせよ。汝は後に残してきた
汝の為に働いてくれる力を。大気も大地も天も，汝の為に働いてくれる。
世間を吹き過ぎる一そよぎの風も
汝を忘れることは決してない。汝は偉大な味方を持っている。
汝の友は歓喜と，苦悩と，
愛と，人間の不屈の精神である。

ワーズワースがソネットのなかで称えた獄中のトゥーサンは，エリオットが小説（フィクション）のなかでロモラやドロシアを通して描き出した，生前からすでに「見えざる聖歌隊」に参加している聖人たちの，現実世界における具現化に他ならない。このワーズワースの詩に対する賛辞が述べられているのは，エリオットが亡くなる年の1880年，実証主義者でありコントの人類教の信者でもあったフレデリック・ハリソン（Frederic Harrison, 1831-1923）に彼女が宛てた手紙においてである。彼女の最大の共感のこもったこの賛辞は，エリオットが彼女の人類教をもはや揺らぐことなく最晩年まで信奉し続けたことの一証左と見なせるものであろう。

V　おわりに

メアリ・アンないしエリオットの宗教的体験は，大小二つの宗教的回心を含み，福音主義的キリスト教と人間主義的信仰との間を大きく揺れ動くものであったと言える。幼少期におけるキリスト教信仰は「旧式の古い高教会派的なもの」から福音主義的なものへと深められていき，思春期をむかえた15歳頃の第一の宗教的回心によって，より禁欲的傾向を強めることになる。しかし成人期をむかえる頃，彼女のキリスト教信仰は動揺をきたし，キリスト教信仰の放棄から人間主義的信仰へむかう第二の，大きな宗教的回心を経験する。そしてその人間主義的信仰は，キリスト教信仰放棄を宣言した「聖戦」の時

には幾分汎神論的傾向を含んだものであったが，やがてワーズワースだけでなくフォイエルバッハやコントらの影響を統合して，超自然的要素を一切廃し，完全に人間主義化・世俗化した人類教に最終的な帰結を見出していくことになるのである。

このメアリ・アンないしエリオットの宗教的軌跡のうち，彼女が詩作を始めた思春期以降の時期に焦点をあてると，(i) 福音主義的キリスト教の時代 (2) 汎神論的傾向の時代 (3) 人類教の時代の3期に大きく分けて整理することができよう。本稿で考察した3編の詩――「この幕屋を」，「人間に対する」および「おお　願わくは」――は，その3期のそれぞれの時期に執筆され，それぞれの時期の信条を吐露した詩と見なせるものである。それゆえ，これら3編の詩を一緒にして通読するとき，いわばテニスンの『イン・メモリアム』に相当する宗教詩として，われわれはそれらの詩のなかにメアリ・アンないしエリオットの「魂の経路」を具体的にたどることができるのである。これら3編の宗教詩は，それぞれ独立したものであるが，メアリ・アンないしエリオットの信条が時代順に吐露された，一種の連作として読むことができる内容をもったものと評価できよう。

注

1　バジル・ウィリー，『十九世紀イギリス思想』，松本啓訳（みすず書房，1985）217.

2　例えばGordon S. Haight, *George Eliot: A Biography* (Oxford: Oxford UP, 1978)；Peter Simpson, "Crisis and Recovery: Wordsworth, George Eliot, and Silas Marner," *University of Toronto Quarterly* 48.2 (1978-79)：108-09; Jerome Thale, *The Novels of George Eliot* (New York: Columbia UP, 1959) 60-61等を参照。

3　宗教的懐疑の後、キリスト教徒の立場を保持したテニスンと不可知論者となったエリオットは，その宗教観に関しては相違がある。しかし，エリオットの最晩年，24年間にわたって連れ添った最愛の夫G. H. ルイスの死に際して，その別離の悲しみに耐える一助として，彼女が繰り返し読んだ詩が、他ならぬこの『イン・メモリアム』であった（Haight, *George Eliot* 516, 518)。

4　テニスンは『イン・メモリアム』を時に "The Way of the Soul" と呼んでいた（Christopher Ricks, ed., *The Poems of Tennyson*, 2nd ed., vol. 2 [Harlow: Longman, 1987]309)。

5　この詩のタイトルははっきりしていない。Haightはこの詩を "Farewell" と呼び，Timothy Handsは最初の1行目の書き出し "As o'er the fields" をこの詩のタイトルとしている（Haight585のindex；Timothy Hands, *A George Eliot Chronology* [Basingstoke: Macmillan, 1989] 5)。仮に，この詩を "O May I Join the Choir Invisible" と同じ構成をもった詩――つまり，モットーとして掲げられている引用句のあとに詩の本文が続き，その詩の本文の第1行目が詩のタイトルを構成する詩――と見なせば，この詩の1行目の全文「野原を夕暮れの明かりでさまようとき」("As o'er the fields by evening's light I stray") がこの詩のタイトルとなる。本稿では上記のいずれの見解も退け，Secor Cynthia Annの説に従い，この詩の冒頭に掲げられている聖句（「ペテロの第二の手紙」第1章14節）がこの詩のタイトルとなっているとする見解を採用することにする（Cynthia Ann Secor, "The Poems of George Eliot: A Critical Edition with Introduction and Notes," diss., Cornell U, 1969, 98)。

なお，この聖句中，「この幕屋（this tabernacle)」とあるのは，正しくは「このわたしの幕屋（this my tabernacle)」である。メアリ・アンが引用を間違ったのであろう。

6　Gordon S. Haight, ed., *The George Eliot Letters*, 9 vols. (New Haven and London: 1954-78) 中のvol. 1, 27. 以下，*Letters*と略す。

7　Alvin Sullivan, ed., *British Literary Magazines: The Romantic Age, 1789-1836* (Westport and London: Greenwood, 1983) 68,73; Angus Easson, ed., *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage* (London and New York: Routledge, 1991) 313.

8　福音主義に関しては，リチャード・D・オールティック，『ヴィクトリア朝の人と思想』，要田圭治・大嶋浩・田中孝信訳（音羽書房鶴見書店，1998）の第5章「福音主義的傾向」を参照。

9　Haight 8.「古い高教会派」と訳した原語は "high-and-dry" で直訳すれば「時勢遅れ派（の)」の意。1830年代のオックスフォード運動から始まる高教会派と区別して，19世紀中頃から用いられるようになった，古い高教会派に対するあだ名である。

なお，父親ロバート・エヴァンズの兄弟のうち，一人はバプティスト，二人はメソディスト――そのうちの一人がSamuel（1777-1849; 18歳のときにメソジストに回心，*Adam Bede* のSethのモデル）であり，彼の妻がメソジストのElizabeth（1766-1849; *Adam Bede*のDinahのモデル）である――になっている。またメアリ・アンの兄のアイザックは，バーミンガムでDockerという個人教師について勉強した折，高教会派の見解に染まっている。このことは，コヴェントリの学校でカルヴィニズムに染まったメアリ・アンとの精神的溝を一層広げることになった（Purkis 31; Haight 19)。

10　メアリ・アンがMrs. Wallington's Boarding Schoolに入学した年は，*Letters* I, lxxiin8, 15n5によれば1827年であるが，同書のp. xxiiiおよびHaight8; Hands 2では1828年となっている。Rosemary Ashton, *George Eliot: A Life*（London: Penguin, 1997）18においても1828年となっているので，本稿でも1828 年を採用することにした。

11　オールティック171-73.

12　Haight ch.1; John Purkis, *A Preface to George Eliot*（London and New York: Longman, 1985）11-31; Hands 1-5による。

13　Haight 19.

14　ジョン・ウェスリによれば、神と人間の相愛関係を示す「愛」の観念は，「『慈悲心・心の謙譲』……更に『温和・柔和・忍耐』……等の人間のいわゆる「気質」の変革を指し示す『内的果実』を内包する」だけでなく，同時に，「『言葉と行為とによる隣人への悪の不作為』『よき業への熱心』という『外的果実』をも包摂する」ものであった。それゆえ，ウェスリが展開する宗教復興運動においては寛大な慈善の実践が熱心に追求されたのである（矢崎正徳，『十八世紀宗教復興の研究』[福村出版，1973]57）。

15　Hands 3.

16　Haight 19-21.

17　J. W. Cross, ed., *George Eliot's Life as Related in Her Letters and Journals*, vol. 1（Edinburgh and London: Blackwood and Sons, 1885）39. なお，この時期のメアリ・アンの読書は，福音主義的良心に基づき，楽しみのために読書することを排除するものであった。虚構作品（fiction）すなわち小説（novels）やロマンス（romances）は読者を魂の救済という厳格な仕事から引き離して，空想（fantasy）の世界へ連れていくもので，有害なものとみなされていたのである。1839年5月にマライア・ルイスに宛てた手紙によると，当時あふれていた宗教小説もその例外ではなく，それらは単なる世俗的な小説よりも有害で，破棄すべきものという意見であった。ただし，すでに人口に膾炙して，絶えず言及されるような「標準的作品（standard works）」は例外としている。そのような「標準的作品」として，『ドン・キホーテ』，バトラーの『ヒューディブラス』，『ロビンソン・クルーソー』，バイロンとサウジーのロマンス詩，スコットの小説と詩，そしてとりわけシェイクスピアの作品が挙げられている（*Letters* I, 21-23; Kathryn Hughes, *George Eliot: The Last Victorian* [New York: Frarar Straus Giroux, 1998]32）。

18　*Letters* I, 27.

19　ヤコブス・デ・ウォラギネ，『黄金伝説　第二巻』，前田敬作・西井武訳（人文書院，1984）345-73.

20　J. L. メイズ編，『ハーパー聖書注解』（教文館，1996）1356-57; ヘンリー・H・ハーレイ，『聖書ハンドブック』第3版（いのちのことば社，1980）614-15.

21　本稿におけるメアリ・アンないしエリオットの詩の引用はすべてGeorge Eliot, *Collected Poems*, edited with an introduction by Lucien Jenkins（London: Skoob Books, 1989）による。

22　*Letters* I, 29.

23　Cross ed., *George Eliot's Life* 59.

24　豊田実，『ヂョーヂ・エリオット』研究社英米文学叢書53（研究社，1938）23. なお，メアリ・アン自身はこの詩を「へぼ詩」と評しているが，これは自作に対する謙遜が混じったものとして，多少割り引いて考える必要があろう（*Letters* I, 27）。Haightは「注意深く練られた詩」と評している（Haight 25）。4行10連からなるこの詩の各連は，弱強5歩格の3行連句にリフレインの "Farewell!" を配したもので，破格がなく，詩形にはかなり苦心して作詩されたものと考えられる（佐藤辰男，『ジョージ・エリオットの作品・環境』第2版[技興社，1979] 155-56）。

25　オックスフォード運動に関しては，主としてオールティック225-32による。

26　ミルナーが著した『キリスト教会の歴史』は，著者の生前には最初の3 巻（13世紀まで扱ったもの）だけが1794-97年に出版された。彼の死後，残りの2巻（16世紀まで扱ったもの）がミルナーの弟Isaac Milnerによって編纂され，増補5 巻本が1800-09年に出版された。その後，この5巻本は，1819年にIsaac Milnerによる追加がなされた新版（5巻本）が出版されるまで数版を数えている。そしてこの新版も，1847年にthe Rev. Thomas Grantham によって改訂がなされた最終の最良版（4巻本）が出版されるまで数版を数えている。ゴードン・S・ハイトはメアリ・アンが読んだ版はChristian Family Library版であろうと推察しているが，Alliboneの辞典によれば，Christian Family Library版（Isaac Milnerによる縮約版）は1844年の出版である。それゆえ，メアリ・アンが1839年に読んだ版は別の版であったと思われる。いずれにせよ，メアリ・アンが実際に読んだ版は不明である（"Milner, Isaac," and "Milner, Joseph," *Allibone's Critical Dictionary of English Literature and British and American Authors,* vol. 2 [Philadelphia, 1891; Tokyo: Hon-no-Tomosha, 1990]; 「ミルナー，ジョーゼフ」，『キリスト教人名辞典』[日本基督教団出版局，1986]; *Letters* I, 25n9）。

27　グレズリー師のこの本は，チルヴァーズ・コトンの地主Mr. Harperがメアリ・アンの福音主義的厳格さを和らげるために彼女に貸した本の一つである。Mr. Harperはオックスフォードの『時局小冊子』も数冊貸

している（*Letters* I, 45; Haight 24）。

28 *Letters* I, 25-26. 1840年3月，マライア・ルイスに宛てた手紙によれば，メアリ・アンはthe Revd. W. Gresleyの*Portrait of an English Churchman*を注意深く再読し，「全編に息づく敬虔な精神」が気に入ったということ，および，グレズリー師の最近作*Clement Walton; or the English Citizen*（1840）を興味深く読んだということが述べられている。また，同手紙には，トラクト運動主唱者たちの最も有名な著作物のうちの三つ，すなわち『時局小冊子』，NewmanやKebleらによって書かれた*The Lyra Apostolica*（1836）そしてKebleの*The Christian Year*（1827）を読もうとしているということ，および，とりわけ後者の二冊に心惹かれていることが述べられている。このようにオックスフォード運動に対しても，メアリ・アンの態度は必ずしも否定的なものではなく，かなり開かれたものとなっていったことがわかる（*Letters* I, 45-46; Hughes 38-39）。

なお，メアリ・アンが1838年と1839年に手紙等の中で言及している著作のほとんどは宗教的なものであり，本稿に掲げている書物のほかにも，福音主義者Hanna Moreの書簡，WilberforceやSir Richard Hill, Mrs. Mary Fletcher of Madeleyのような著名な福音主義者の伝記，「ポリネシアの使徒」と呼ばれたJohn Williamsのような宣教師たちの物語，さらにはArchbishop Leightonの*A Practical Commentary upon the Two First Chapters of the First Epistle of Peter*（1693）と*Theological Lectures*（メアリ・アンが読んだのは1839年版）のような本格的な宗教書などがある。また，1839年末にはキリスト教の誕生から宗教改革までの教会史の図表を作成する仕事に取りかかる決心をメアリ・アンはしている。1840年の3月末にはその図表の概略がマライア・ルイスに送られている。11月までには仕上げるつもりで，メアリ・アンはこの仕事に精を出していたが，1840年5月に彼女が構想していたのと同様の図表が出版されたために，この計画は中止されることになる。この教会史の図表のエピソードも当時のメアリ・アンの学識とキリスト教信仰の熱意をよく伝えるものであろう（Haight 24; *Letters* I, 34-35, 35n7, 40-41, 44-45, 51, 66;「ウィリアムズ，ジョン」，『キリスト教人名辞典』）。

29 Secor 98.

30 *Letters* I, 25.

31 メアリ・アンは1839年からコヴェントリの語学教師Joseph Brezziについてイタリア語をならっていたが，1840年3月からBrezziからドイツ語もならうことになる。彼からドイツ語でならった小詩がメアリ・アンの気に入り，英訳を試みたのが，この「問いと答え」である。この翻訳詩の原典に関しては，Maurice Stang, "The German Original of a George Eliot Poem," *Notes and Queries*, n.s. 21, no. 1（January, 1974）: 15を参照。

32 *Letters* I, 133.

33 ウィリー 222.

34 メアリ・アンが購入していたHennellの*Inquiry*の本は初版ではなく，1841年8月に出版された第2版である（Hughes 46; William Baker, *The George Eliot-George Henry Lewes Library: An Annotated Catalogue of Their Books at Dr. William's Library, London* [New York & London: Garland, 1977]93）。

35 Hughes 48-49; 和知誠之助，『ジョージ・エリオットの小説』改装版（南雲堂，1974）36n2; Cross, ed. 93, 102-03; *Letters* I, xliii-xliv.

36 *Letters* I, 125-26.

37 エリオットやマシュー・アーノルドのようなヴィクトリア朝の知識人たちに見られる，キリスト教の教義は否定するが，それが説く倫理は尊重する立場を，オールティックは「倫理的キリスト教（ethical Christianity）」と呼び，「歴史的・教義的キリスト教」と対比させている（オールティック259）。

38 *Letters* I, 128-29.

39 *Letters* I, 138n7; 臼田昭，「ジョージ・エリオットの場合：『フロス河の水車小屋』について」，『ヴィクトリア朝小説における父と子』，松村昌家・臼田昭・井出弘之・佐野晃執筆（英宝社，1991）38.

40 *Letters* I, 136.

41 メアリ・アンは15歳の頃の第一回目の福音主義的回心以来，ロマン派の詩はあまり読まなくなっていたが，「揺れる判断」の頃からロマン派の詩人たち――バイロン，シェリー，コールリッジ，サウジーそしてとりわけワーズワース――により真摯な関心を寄せ，それらの詩を読むことに大きな喜びを見出すようになっていく。英国では1830-40年代に熱烈なワーズワース崇拝者が存在するようになる（ワーズワースが桂冠詩人に選ばれるのは1846年である）が，メアリ・アンも1839年にその仲間入りをし，6巻本のワーズワース全集（1836-37年にMoxsonから出版された5番目の全集）を購入さえしている。以後，彼女のワーズワース崇拝は終生つづくことになる（*Letters* I, 29, 34; Haight 29; Thomas Pinney, "George Eliot's Reading of Wordsworth: The Record," *Victorian Newsletter* 24 [1963]: 20-22）。

42 以下，本稿におけるコールリッジの思想およびその哲学的・宗教的背景に関しては岡本昌夫，『想像力説の研究』（南雲堂，1967）第一篇第四章および第二篇第一章，ワーズワースの宗教に関しては原一郎，『ワーズワース』改訂版（北星堂，1977）による。

43 Wordsworth, "Lines Composed a Few Miles above

Tintern Abbey on Revisiting the Banks of the Wye during a Tour," l. 106 in *Wordsworth Poetical Works*, new ed. (1936; Oxford: Oxford UP, 1981). 以下，Wordsworthの詩からの引用は特にことわらない限りこの版による。

44 Wordsworth, "*Addendum* to *The Ruined Cottage*," MS. B, 1-2. この詩の引用は原38, 引用詩原文12からの孫引き。

45 Wordsworth, "Tintern Abbey," l. 94.

46 Wordsworth, *The Prelude*, Bk.8のタイトル "Retrospect. Love of Nature Leading to Love of Man" を参照。

47 *Letters* I, 206. なお，メアリ・アンの書斎にあったキリストの像は，19世紀の教会芸術作品の中で最も人気を博したものの一つと評されているThorwaldsen (1768-1884) の大理石の彫像『キリスト』(1821) の複製，絵はメアリ・アンがシュトラウスの翻訳の口絵として使おうと考えていたキリストの銅版画である (*Letters* I, 206n8)。

48 『ウェストミンスター・レヴュー』誌は，1824年功利主義者のBenthamがJames Millの助力を得て創刊した自由主義的・急進的立場にたつ評論誌。1836年から40年には誌名が*London and Westminster Review*に変更され，James Millの息子John Stuart Millが編集を行った。その後，再度誌名が*Westminster Review*に変更されている。メアリ・アンが編集したのは1852年1 月号から1854年1月号までの計 9 号である。彼女が編集に携わった時期，同誌は政治的には改革に賛成の立場を維持し，外国事情も広範にカヴァーしながら，とくに現代文学の評論に力を入れ，John Stuart Millが編集していた時に獲得していた重要さを回復した，と評されている (Purkis 53; Walter E. Houghton, ed., *The Wesley Index to Victorian Periodicals 1824-1900*, vol. 3 [Toronto and Buffalo: U of Toronto P, 1979]553-54)。

49 Ludwig Feuerbach, *The Essence of Christianity*, trans. George Eliot (New York: Harper, 1957) 159, 271, 277.

50 以下，コント主義とメアリ・アンの関係については Purkis 45-46による。

51 エリオットの葬儀は，G. H. ルイスの時と同様，ルイス一家とは既知の間柄であったユニテリアン派の牧師Dr. Thomas Sadlerによって執り行われた (Martha S. Vogeler, "The Choir Invisible: The Poetics of Humanist Piety," *George Eliot: A Centenary Tribute*, ed. Gordon S. Haight and Rosemary T. VanArsdel [London: Macmillan, 1982]65)。

52 Purkis 45. なお，本稿の注37も参照のこと。

53 *Letters* III, 231. エリオットが処女作 "Amos Barton" の第一部を発表したのが1857年1月。そして "Amos" と他の2編をあわせて*Scenes of Clerical Life*として出版したのが1858年1月である。この習作的な時期をへて，初の本格的な小説として執筆された*Adam Bede*が出版されたのが1859年2月である。1859年末といえば，2作目の長編小説*The Mill on the Floss* (1860) を執筆中の時期にあたる。

福音主義的キリスト教信仰の放棄から人間主義的宗教への移行は，この時期に書かれたメアリ・アンのエッセイ "Evangelical Teaching" (1855) における福音主義派の有名な説教師Dr. Cumming に対する批判および二人の著名な作家の著作に対するメアリ・アンの評価の180度の反転にも顕著に見てとれる。その一つは福音主義的なMrs. Hanna Moreの書簡集への絶賛から嫌悪であり，他の一つは暗記するほど愛読したYoungの生と死と霊魂不滅をうたった詩*Night Thoughts* (1742-45) への公然たる非難である (*Letters* I, 7, 245; Haight 24; George Eliot, "Worldliness and Other-Worldliness: The Poet Young" [1857])。

54 Cf. Vogeler 65.

55 Vogeler 65, 80n5. なお，Dr. Thomas Sadlerはエリオットの葬儀において，この詩の第2行目の "immortal dead who live again" を "who still live on" と変更して引用している。エリオットの葬儀においてこの詩が歌われたとも言われているが，この点ははっきりしない。

56 例えば，ロンドンの実証主義者のセンターの一つであったNewton Hallでの礼拝で使用された本 (*Service of Man*, 1890; 144篇の詩を収めたもの) に，また、ロンドンの倫理協会 (ユニテリアン派から生じたもの) が出版した聖歌集 (*Hymns of Modern Thought, Words and Music*, 1912) に、エリオットのこの詩が収められている。作曲されたものとしては，Henry Holmsが実証主義者のために作曲したカンタータ (1883年12月31日にNewton Hallで演奏) や，Cyril Bradley Rootham が作曲した合唱曲などがある。詳しくはVogler 76-79, 79nn23-34を見よ。

57 例えば，ダンテの『神曲』の「天国篇」第10歌，第14歌に出てくる，栄えある魂の群が歌う「光明の合唱」，ゲーテの『ファウスト』の最終場面において，合唱しながら現れる天使たち，あるいは，Dante Gabriel Rossetti, *The Blessed Damozel* (1850) の中の「神の聖歌隊 (God's choristers)」(l. 14) などを参照。

58 "Church, sb. 4. c. *Visible Church*," *OED*;「見ゆる教会」および「見えざる教会」，『キリスト教大事典』改訂新版第 8 版 (教文館, 1985) を参照。

59 Vogler 75-77.

60 Thomas Hardy, "The To-Be-Forgotten," *The Complete Poems of Thomas Hardy*, ed. James Gibson (London: Macmillan, 1976) 144.

61 ジリアン・ビア，『ダーウィンの衝撃』，渡辺ちあ

き・松井優子訳（工作社，1989）187, 333, 447n22. この詩が執筆された年の前年に発表された*Felix Holt*（1866）の第5章のエピグラフにおいて，すでに太陽の冷却のことが言及されている：「時とともに全ては冷めていく――あの太陽ですら例外ではなく，遂には灼熱はあまねく静まり，過熱するところは一つとしてなくなるそうな。」（冨田成子訳，『急進主義者フィーリクス・ホルト（上）』[日本教育センター, 1991]）

62 George Eliot, "Janet's Repentance," *Scenes of Clerical Life*, ed. David Lodge（1973; Harmondsworth: Penguin Books, 1975）412.

63 George Eliot, *Middlemarch*, ed. W. J. Harvey（1965; Harmondsworth: Penguin Books, 1973）896.

64 原 68.

65 *Letters* VII, 262.